国際ワークショップ

現代中国における少数民族文化の動態

新免　康　・　田中　周

2015 年 2 月 14 日（土）に、東京大学東洋文化研究所・会議室を会場として、ムスリムの民族を中心に現代中国における少数民族文化の動態に焦点を当てた国際ワークショップが開催された。NIHU プログラム・現代中国地域研究早稲田大学中心拠点、NIHU プログラム・イスラーム地域研究東京大学拠点、中央大学政策文化総合研究所プロジェクト「中央ユーラシアと日本:研究動向と現地状況」の共同主催で、オーガナイザは新免康と田中周が務めた。本稿で本ワークショップの概要について報告する。

ワークショップの基本的な趣旨は、以下の通りである。

現代中国は 55 の少数民族を抱える多民族国家である。中華人民共和国成立後、「民族区域自治」政策を通して、制度化された枠組に沿った「民族文化」の保持が保証される一方、少数民族社会は国家中央を震源とする激しい政治的変動の影響を受けてきた。1980 年代の「改革開放」後、民族・宗教政策の転換により、少数民族自身による「民族文化」や「民族史」の編成・構築と強調という社会的潮流が顕在化する一方、1990 年代以降になると少数民族社会は、非ムスリムのマジョリティを中心とする、「辺境」部の経済的統合化の圧倒的な進行や、都市化の著しい進展などにともなう社会経済的変動を経験することとなった。さらに 2000 年以降、西部大開発、上海協力機構域内の地域経済協力、「シルクロード経済ベルト」構想の推進により、辺境地域を取り巻く環境は様変わりしている。加えて近年、中国国内の研究者から現行の民族政策の限界が叫ばれ、「少数民族」および「自治区域」という枠組みの再考をはじめとする様々な改革案が議論される状況が出現している。このような「変動下」にある現代中国の状況に鑑み、本ワークショップでは、とくにウイグル、カザフ、回族などムスリムの少数民族を中心に、おもに 1980 年代以後の著しい社会変容とその中における少数民族文化の様相の内実について、精神的背景も考慮に入れながら、文学、教育、コミュニティの持続と変容、食文化、宗教文化、文化遺産、などの側面から動態的に検討を加えたい。その際、民族間・地域間における比較の視点を重視する。

上記のような趣旨のもと、中国および日本の 7 名の研究者により研究報告がなされた。各

研究報告の内容について、以下に簡単に紹介しよう。プログラムについては、本稿末尾を参照されたい。

王建新の基調講演は、近年の中国における少数民族の社会・文化に関する研究の基本的な動向について紹介した後、自らの新疆回族社会に関する実地調査をもとにした研究成果を提示した。2010 ～ 2013 年に昌吉回族自治州の沙湾県・玛纳斯県・呼図壁県・昌吉市の回族集住地域で行った調査に基づき、婚姻、家族、経済発展及び伝統文化の構築などに関する諸データをまとめ、回族コミュニティの形成過程と、近年のコミュニティにおける生活と意識の変化について検討した。その中で、回族コミュニティの形成において、原籍地における血縁関係、地縁関係、宗教信仰などが基本要素として機能していたこと、文化状況として、伝統文化の維持には多民族雑居や多言語・多宗教の地域環境だけでなく、政府の管轄や経済発展の影響も関わりをもっていること、微妙な調整や妥協とも言うべき民族間の文化融合の動きや新しい伝統の創出が見られることを明らかにした。

ディルムラト・オマルの報告は、中央アジアのテュルク系諸民族の間で、イスラーム化が進んだ後も、シャーマニズムが表面的にはイスラームの形式を採りつつ、生活習慣や風俗の面で根強く存続してきた歴史的プロセスを明らかにした上で、新疆のシャーマニズムをめぐる状況について検討した。中国文化大革命の時期においてもシャーマニズムはその強靭な生命力と適応力から民間で信仰され続けており、改革開放後の一時期には公開の場でも関連する活動が行われるようになったが、まもなくイスラームの原則を尊重する動向を背景に、再び秘密裏に信仰することを余儀なくされたと指摘した上で、実地調査に基づき、関連する画像資料を提示しつつ、シャーマニズムの儀礼等の具体的な実態について紹介した。

リズワン・アブリミティの報告は、新疆の少数民族教育において 1990 年代より開始された「実験クラス」の展開と、その後の現在に至る経緯について、当該方式の立案・提唱に関与した人々の意図にも注目しつつ検討した。理数系の科目と漢語・英語の語学科目を漢語で行い、その他の科目を従来通りの民族言語で行うという方式が採用された「実験クラス」は、民族言語で実施されていた従来の教育形態を、その内実において大きく変位させるものであったこと、その後、実際面においていくらかの問題をともないながらも、漢語教育の優れたモデル方式として急速な広がりを見せ、その延長線上に、「民族学校」における全面的な「双語」教育の実施という、近年の段階へとつながったことを明らかにした。

新免康の報告は、清朝統治下において、清朝より与えられた爵位を世襲で継承しつつ、行政上で重要な役割を担ったウイグル族有力者の一族である「回部王公」が、ツーリズムの飛躍的発展という趨勢の中で、2000 年代に入ってからどのように表象化されたのかについて検討した。王公一族の中でとくに有力であったとされる一族に関わる「王府」が「復元」されて、大々的に公開されるとともに、関連する歴史的施設が重要な文化遺産として改修・整

備されたこと、また、各種メディアにおいてもとりあげられ、とくにテレビ・ドラマ『吐魯番郡王』などいくつかの特徴的な創作表現が出現したことを示した。その上で、このような文化面における動向の背景に「民族団結」への政治的志向性が垣間見られることを指摘した。

野田仁の報告は、1980 年代以降のカザフ族による出版文化の展開の様相について提示するとともに、その背景について考察した。この時期における出版事業の活性化は、中国全体における「民間文学」の発展と深く結びついていたこと、その背景としてアラビア文字表記の正書法の規範化、新疆カザフ社会における教育の普及、旧ソ連カザフスタンのカザフ人との交流という要素が中国のカザフ族文化に与えた影響、などが挙げられることを明らかにした。そのような点を踏まえた上で、カザフ語出版文化の今後の動向を見ていく場合、カザフ語の普及状況、とくに双語教育による影響に注視する必要があることを指摘した。

砂井紫里の報告は、福建省在住のムスリムの清真食品消費をめぐる言説と実践の事例から、清真とハラールの諸相について考察した。その中で、地方行政による清真食品生産管理、ムスリムと非ムスリムの消費者、およびサービス提供者がどのように清真食品を解釈し、消費しているのか、その共通点と相違点に着目することにより、政府、サービス提供者、消費者、宗教専門家、個人、ムスリム、非ムスリムといった、さまざまなアクターのそれぞれの清真解釈と消費において、民俗語彙としての「清真」と、宗教規範およびグローバルな文脈における現代的「ハラール」が、非ムスリム的な脈絡において解釈され、交渉しあい、変容している過程の具体的な様相を明らかにした。

木村自の報告は、台湾における中国ムスリムのアイデンティティについて、ムスリムたちが生きる社会的・政治的ディスコースとの相互作用のなかで、在台湾中国ムスリム・エリートによるそのアイデンティティ語りの揺れに着目しつつ検討した。中国大陸とは異なる民族・宗教政策のもとで台湾の中国ムスリムは、時代の政治的・社会的ディスコースを敏感に読み取り、そのディスコース空間を利用しながら、戦略的にアイデンティティを表明しようとしたこと、台湾社会の変化が中国大陸から台湾へと移住した在台湾中国ムスリムのアイデンティティを変容させると同時に、彼らのアイデンティティ表明のあり方が台湾社会側へも影響を与えていることを指摘した。

以上の 7 報告の後、総合討論において、新保敦子が各報告についてのコメントを述べ、報告者に質問を投げかけたが、それを受けて各報告者からの応答とコメントが提示された。最後に、それらのやりとりを踏まえた上で、フロアからの質問・意見を交えた活発な議論が展開された。各地域、各民族、各テーマを事例とする最新の具体的研究成果に基づいて、これらを横断した総合的ディスカッションが交わされた学術的意義は大きい。

今回のワークショップにおいては、3 名の中国人研究者が招聘され、現代の少数民族文化に関するテーマ性のもと、日本人研究者と研究報告および議論の場を共有したことは、一定

の意味があったと考える。とくに新疆から 2 名の研究者が参加し、宗教文化、学校教育というそれぞれの分野において自らの調査研究の成果を披露したことは注目される点である。当該分野における国際的な交流を促進する上で、本ワークショップは有益な機会を提供したと思われる。今後も、当該ワークショップを契機としつつ、新疆を含む諸地域の研究者との協同作業などを視野に置く形で、日・中の研究者による共同研究や新たな企画による学術会議などが組織され、中国ムスリムの社会・文化に関する研究がさらに進展することを期待したい。

日程：2015 年 2 月 14 日（土）

会場：東京大学東洋文化研究所・大会議室

主催：
・NIHU プログラム・現代中国地域研究早稲田大学中心拠点（早稲田大学現代中国研究所）
・NIHU プログラム・イスラーム地域研究東京大学拠点（東京大学大学院人文社会系研究科次世代人文学開発センター・イスラーム地域研究部門）
・中央大学政策文化総合研究所プロジェクト「中央ユーラシアと日本：研究動向と現地状況（第 2 期）」

【プログラム】

＜挨拶・趣旨説明＞
新免康（中央大学文学部）
田中周（愛知大学国際中国学研究センター）

＜基調講演＞
王建新（蘭州大学西北少数民族研究中心）
「北新疆回族社会の形成と変貌――コミュニティ拡張に見られる文化の創造」

＜第 1 セッション＞

地木拉提・奥邁爾（ディルムラト・オマル）（新疆師範大学民族学与社会学学院）
「中国新疆穆斯林族群的薩満教――宗教人類学研究的一個個案」
熱孜万・阿布里米提（リズワン・アブリミティ）（新疆大学政治与公共管理学院）
「1990 年代の新疆における「漢語教育」の動向」

＜第 2 セッション＞
新免康（中央大学文学部）
「清代「回部王公」の現代」
野田仁（早稲田大学高等研究所）
「新疆カザフ族の出版文化の展開」

＜第 3 セッション＞
砂井紫里（早稲田大学イスラーム地域研究機構）
「清真とハラール――現代中国における回族の食と産業」
木村自（人間文化研究機構）
「戦後台湾の政治的・社会的変容に対する在台湾中国ムスリムの戦略――アイデンティティ語りとその揺れについて」

＜総合討論＞
司会：梅村坦（中央大学総合政策学部）
討論者：新保敦子（早稲田大学教育・総合科学学術院）

＜閉会の辞＞
梅村坦（中央大学総合政策学部）

（中央大学文学部）
（愛知大学国際中国学研究センター）